

新約聖書「マタイによる福音書」の冒頭に配置された5つの物語の構造：「対称性仮説」の蓋然性

著者	大喜多 紀明
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	16
号	1
ページ	25-48
発行年	2018
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009615

新約聖書「マタイによる福音書」の冒頭に配置された5 つの物語の構造：「対称性仮説」の蓋然性

大喜多 紀明

The Structure of 5 Stories as the Beginning of the New Testament "the Gospel by Matthew": Probability of 'Symmetry-hypothesis'

Noriaki OHGITA

要旨：大林（1979）は、裏返し構造を、異郷訪問譚形式の物語に見いだされる特徴的な構造と推認した。一方、異郷訪問譚とは言えない物語にも裏返し構造による物語の存在が、大喜多（2016）ではアイヌ口承テキストに、大喜多（2017）では旧約聖書（日本聖書協会 1989）の「創世記」冒頭の5編の物語テキストに確認されており、当該構造が見いだされる範囲については、異郷訪問譚の範囲に限定するべきではないことが指摘されている。ただし、大喜多（2016）および大喜多（2017）が指摘した事例数は決して多いとは言えない。そこで、本稿では、旧約聖書を検討した大喜多（2017）の知見を前提に、そもそも聖書テキストには、異郷訪問譚とは言えないにもかかわらず、裏返し構造になりやすい性質があると言えるか否かの確認を行うべく、今まで検証されてこなかった、新約聖書（日本聖書協会 1989）に収納された物語を題材に、裏返し構造を当てはめる観点による分析を行った。なお、本稿では、新約聖書に収納された「マタイによる福音書」の巻頭の5編の物語をテキストとした。

キーワード：裏返し構造 異郷訪問譚 新約聖書 マタイによる福音書

1. 問題の所在

ルーマニアのフォークロリストであるミハイ・ポップが昔話「兵士としての少女」を分析した知見¹を受けた大林（1979）は、いくつかの日本の異郷訪問譚に対してポップの構造²を

¹大林（1979）によれば、かかる知見は、『Folclor Literar』（1967年出版）に収納されたポップの論文「Metode noi in cercetarea structurii basmelor」で示されており、かかる知見に関してはこれが初出であるのだが、筆者はこの論文を入手することができなかった。その代わりに、筆者は、昔話「兵士としての少女」に関する当該箇所が引用された Pop（1990）を参照した。

当てはめることにより、当該構造を、異郷訪問譚の形式による物語に見いだされる構造上の「共通の約束」（大林 1979：8）とみなした³。かかる大林の推認は、あくまでも、異郷訪問譚と言える物語に裏返し構造が見いだされることを示すものであり、裏返し構造がみとめられたとすれば、直ちに、異郷訪問譚であるということを示したのではない。また、大林（1979）は、異郷訪問譚と言えない物語においても、はたして裏返し構造が見いだせるか、という点を、今後検証すべき課題とみなした。なお、大林の推認に基づき、依田（1982）は、韓国の異郷訪問譚にも裏返し構造が見いだされることを述べた。ただし、依田（1982）は、異郷訪問譚とは言えない物語に裏返し構造を持つものがあるか、については言及していない。

以上を踏まえ、大喜多（2016）では、異郷訪問譚とは言えない物語にも裏返し構造を持つ事例がはたして存在するか⁴、を検証することを目的に、アイヌ口承テキストを題材として、裏返し構造を当てはめる観点による分析が行われた。なお、大喜多（2016）では、かかる分析を行ううえでの予備的検証が行われている。具体的には、アイヌ口承テキストの場合においても大林の推認が適用できない訳ではないこと示す知見が示されている⁵。大喜多（2016）によれば、アイヌ口承テキスト「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおぼけ」・「氷の上で」については、異郷訪問譚とは言えないにもかかわらず裏返し構造による構成である。大喜多（2016）では、かかる異郷訪問譚とは言えないにもかかわらず裏返し構造が見いだされることについて、アイヌ民族によるテキストでは、例えば、対句⁶（高原 1998：27-36）や交差対句⁷（大喜多 2012：181-213）のような対称性に富む修辞技法が頻用されること、換言すれば、アイヌ民族には対称性を好む心性がみとめられている（切替 2007：35-56、皆川ら 2010：146-149）ことから、かかる心性が、裏返し構造が発現する一因である可能性が指摘された。なお、こうした対称性は裏返し構造の前提である。

こうした、アイヌ口承テキストにおける、異郷訪問譚とは言えないにもかかわらず裏返し構造が見いだせる理由が「対称性を好む心性」に一因する、とする説⁸を検証することを目的とし、アイヌ民族と同様、対句（例えば、左近 1971）や交差対句（例えば、左近 1992）が頻用されるテキストとして知られている聖書を題材に、とりわけ、大喜多（2017）では、旧約聖書に収納された「創世記」の冒頭に配置された物語をテキストとしての調査が行われた。その結果、大喜多（2017）で調査した5つの物語の内、「失樂園」物語、「カインによるア

²本稿では、これを「裏返し構造」と呼ぶ。

³本稿では、これを「大林の推認」と呼ぶ。

⁴これは、大林（1979：9）が提示した課題の一つである。

⁵この予備的検証は、大林の推認に関する蓋然性を検証するものでもある。

⁶類似した表現の語句を並列させる修辞技法を、「対句」、「パラレリズム」、「平行体」などと呼ぶ場合があるが、便宜上、本稿では「対句」と呼ぶこととする。

⁷例えば、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow (X) \rightarrow C \leftarrow B \leftarrow A$ のように、類似した表現の対が同心円状に配列する修辞技法を、一般に、「交差対句」、「キアスムス」、「集中構造」などと呼ぶ場合があるが、便宜上、本稿ではこれを「交差対句」と呼ぶこととする。なお、交差対句には、中央の折り返し箇所（X）が存在する場合としない場合があるのだが、本稿では、双方を区別しないこととする。

⁸本稿ではこれを「対称性仮説」と呼ぶ。

ベル殺害」物語、「バベルの塔」物語は、異郷訪問譚とは言えないにもかかわらず裏返し構造がみとめられることを示す知見が提示された。つまり、大喜多（2017）では、対称性仮説の蓋然性が高いことを支持する結果が示された。ただし、大喜多（2016）および大喜多（2017）において提示された事例数は合計7例に過ぎず、このような件数は、当該仮説の蓋然性を論じるうえで、決して十分に多い事例数とは言えない。この点に付き、大喜多（2017：214）は、「今後も、他のアイヌ口承や聖書テキストを対象に検証を進めて行く」必要性があると述べている。

本稿は、大喜多（2017）が指摘した、さらなる検証の必要性を受け、大喜多（2017）で検証を行った旧約聖書に収納された「創世記」冒頭の5つの物語と同様、聖書テキスト⁹には属するものの、大喜多（2017）では検証しなかった範囲に相当する新約聖書に注目し¹⁰、かかる新約聖書に収納された「マタイによる福音書」の冒頭の5編の物語に関し、大喜多（2017）と同様の手法による分析を行うことにより、対称性仮説の蓋然性に関する検証を行うこととする。

2. 異郷訪問譚の定義

本稿は、異郷訪問譚と言えるテキストの構造上の「共通の約束」が裏返し構造であるという大林の推認、ないし、異郷訪問譚と言えない場合にも、アイヌ口承テキストおよび聖書テキストにおいては、それぞれ裏返し構造を当てはめられる事例が存在することを示した大喜多（2016）、大喜多（2017）を踏まえている。また、本稿の直接の先行研究が大喜多（2017）である。以上より、本稿における異郷訪問譚の定義を、大喜多（2017）における定義と同一にすることとする¹¹。

大喜多（2017）では、以下の①から④のすべての特徴に合致する形式の物語を異郷訪問譚と呼んだ¹²。

- ①：異郷訪問譚は、訪問者が訪問者にとっての異郷を訪問する形式の物語である。
- ②：訪問者は「カミ」か「人間」である。
- ③：訪問者は、特殊な方法・手段により、異郷を訪問する。
- ④：選ばれた者しか異郷を訪問できない。

本稿でも、①から④に示した特徴を「異郷訪問譚の特徴」と呼ぶこととし、かかる異郷訪問

⁹聖書（日本聖書協会 1989）は、旧約聖書と新約聖書により構成されている。さらに、旧約聖書は合計39の「巻」（例えば、「創世記」、「出エジプト記」、「レビ記」など）により構成されており、新約聖書は合計27の「巻」（例えば、「マタイによる福音書」、「マルコによる福音書」、「ルカによる福音書」など）により構成されている。

¹⁰旧約聖書の場合と同様、新約聖書においても、対句（村井 2010：131-136、山田 2014：1-9）や交差対句（森 2007、村井 2009：65-95）が頻用されることが知られている。

¹¹大喜多（2017）での異郷訪問譚の定義は勝俣（2009）に基づいている。

¹²大喜多（2016）における異郷訪問譚の定義も、これと同一である。

譚の特徴のすべてを満たす特徴を持つテキストを「異郷訪問譚」と呼ぶこととする。

3. 裏返し構造の定義

本稿では、テキストの構造が裏返し構造と言えるか否かの検証を行う。その際、2節で示した、本稿における異郷訪問譚の定義を大喜多（2017）と同一のものとしたのと同様、本稿における裏返し構造の定義についても大喜多（2017）と同様のものとする。

大喜多（2017）では、以下に述べる A から B を、「裏返し構造の特徴」とした。

- A：物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する。
- B：物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する。

本稿においても、上述の裏返し構造の特徴である A および B の特徴を「裏返し構造の特徴」と呼ぶこととする。また、本稿におけるテキストに、かかる裏返し構造の特徴を照合することにより、A および B の双方の特徴が当てはまる場合、この構造を「裏返し構造」と呼ぶこととする。

4. 「創世記」冒頭の5つの物語

大喜多（2017）では、「創世記」冒頭に配置された5つの物語の構造を検証した。なお、ここでの5つの物語とは、配列順に、「天地創造」物語¹³、「失樂園」物語¹⁴、「カインによるアベル殺害」物語¹⁵、「ノアの箱舟」物語¹⁶、「バベルの塔」物語¹⁷であり、大喜多（2017）では、物語Ⅰ～Ⅴの範囲を以下のように定めた。

- 物語Ⅰ：「創世記」1章1節～2章3節
物語Ⅱ：「創世記」2章4節～3章24節
物語Ⅲ：「創世記」4章1節～4章16節
物語Ⅳ：「創世記」6章11節～9章19節
物語Ⅴ：「創世記」11章1節～11章9節

なお、物語Ⅱと物語Ⅲ、物語Ⅲと物語Ⅳ、物語Ⅳと物語Ⅴの間には、系図あるいは短い挿話が配置されているのだが、大喜多（2017）では、当該系図あるいは短い挿話箇所についての

¹³本稿では、これを「物語Ⅰ」と呼ぶ。

¹⁴本稿では、これを「物語Ⅱ」と呼ぶ。

¹⁵本稿では、これを「物語Ⅲ」と呼ぶ。

¹⁶本稿では、これを「物語Ⅳ」と呼ぶ。

¹⁷本稿では、これを「物語Ⅴ」と呼ぶ。

分析は行っておらず、物語Ⅰ～Ⅴのどの範囲にも含めないこととした。

こうした前提の下、大喜多（2017）では、物語Ⅰ～Ⅴのそれぞれのあらすじを示した。また、当該物語Ⅰ～Ⅴに異郷訪問譚の定義を当てはめることにより、それぞれの物語が異郷訪問譚の形式と言えるか否かを判別した。そのうえで、当該物語Ⅰ～Ⅴを裏返し構造の特徴と照合することにより、それぞれの物語が裏返し構造と言えるか否かの判別をした。以下は、物語Ⅰ～Ⅴが異郷訪問譚か否か、ないし、裏返し構造か否かについて、大喜多（2017）が示した知見である。

物語	異郷訪問譚 ¹⁸	裏返し構造 ¹⁹
物語Ⅰ：	×	×
物語Ⅱ：	×	○
物語Ⅲ：	×	○
物語Ⅳ：	○	○
物語Ⅴ：	×	○

つまり、物語Ⅳは、異郷訪問譚と言える形式であり、かつ、裏返し構造と言える構造であった。それに対し、物語Ⅱ・物語Ⅲ・物語Ⅴでは、異郷訪問譚と言えないにもかかわらず裏返し構造と言える構造がみとめられた。かかる物語Ⅱ・物語Ⅲ・物語Ⅴにみとめられた知見は、対称性仮説を支持するものであった。

ただし、旧約聖書全体が1326ページの分量²⁰であるのに対し、大喜多（2017）で検証した5編の物語が収納された範囲は、たかだか1ページから12ページの範囲²¹であり、大喜多（2017）で検証した範囲は、旧約聖書全体からみれば、ごく僅かであると言っても差し支えない²²。さらに、大喜多（2017）では、新約聖書には言及されていない。

つまり、聖書を範囲として、異郷訪問譚と言えないテキストにも裏返し構造が発現しやすい傾向あるか否かを検証するには、大喜多（2017）で検証されていない範囲を検証することにより、当該対称性仮説の蓋然性を確認する必要があると言え、大喜多（2017）では注目しなかった範囲に相当する新約聖書も、当然、当該対称性仮説の蓋然性を検証するに際し、有効な範囲に該当すると言える。

5. テキスト

新約聖書は、合計409ページ²³からなっており、27巻で構成されている。本稿でテキスト

¹⁸異郷訪問譚と言える場合は「○」とし、異郷訪問譚と言えない場合は「×」とする。

¹⁹裏返し構造と言える場合は「○」とし、裏返し構造と言えない場合は「×」とする。

²⁰日本聖書協会（1989）を参照した。

²¹日本聖書協会（1989）を参照した。

²²旧約聖書における大喜多（2017）で検証していない範囲については、別の機会に報告するつもりである。

²³日本聖書協会（1989）を参照した。

とする「マタイによる福音書」は、27巻の内の第1巻目である。また、本稿で扱う範囲は、新約聖書の1ページから4ページとする²⁴。なお、本稿のテキストを「マタイによる福音書」とし、かつ、本稿で扱う範囲を上述のように定めた理由は、大喜多（2017）でのテキストを旧約聖書の第1巻目である「創世記」の冒頭に配置された物語としたのと同様、ひとえに、新約聖書の第1巻目であり、かつ、冒頭に配置された一連の物語であることによる²⁵。

本稿では、便宜上、「マタイによる福音書」1ページから4ページまでの範囲が、「イエス誕生」物語²⁶、「エジプト訪問」物語²⁷、「ヨハネによる洗礼」物語²⁸、「イエスが受けた試練」物語²⁹、「イエスのガリラヤ宣教」物語³⁰により構成されているものとし³¹、それぞれの物語の範囲は以下のごとくであるとした³²。

物語①：「マタイによる福音書」1章18節～1章25節

物語②：「マタイによる福音書」2章1節～2章23節

物語③：「マタイによる福音書」3章1節～3章17節

物語④：「マタイによる福音書」4章1節～4章11節

物語⑤：「マタイによる福音書」4章12節～4章25節

大喜多（2017）では、テキストを分析するに際し、まず、各テキストのあらすじを記した。そのうえで、当該各テキストが異郷訪問譚の形式と言えるか否かの判別を、異郷訪問譚の特徴と照合することにより行い、かつ、当該各テキストが裏返し構造と言えるか否かの判別を、裏返し構造の特徴と照合することにより行った。なお、本稿におけるテキストの分析は、大喜多（2017）と同様の手法により行うこととする。

6. あらすじ

本節では、物語①から物語⑤のあらすじを示す。なお、あらすじ中の数字・記号は筆者によるものである。

6.1. 「イエス誕生」物語

²⁴かかる、本稿で扱う範囲は、新約聖書全体の範囲に比すれば非常に狭い範囲であると言える。

²⁵「マタイによる福音書」には「創世記」と密接に関連した記述があるとされる。

²⁶本稿では、これを「物語①」と呼ぶ。

²⁷本稿では、これを「物語②」と呼ぶ。

²⁸本稿では、これを「物語③」と呼ぶ。

²⁹本稿では、これを「物語④」と呼ぶ。

³⁰本稿では、これを「物語⑤」と呼ぶ。

³¹ここでの物語の名称は、筆者が便宜上付けたものである。

³²大喜多（2017）では、系図箇所を物語とみなさなかった。本稿でも、大喜多（2017）の場合と同様に、系図が記された箇所である1章1節～1章17節を、物語とみなさないこととし、本稿における検証の範囲としないこととする。なお、記載された「章」および「節」は日本聖書協会（1989）によるものである。

本節では物語①のあらすじを述べる。

<あらすじ>

(1) イエスの母であるマリヤはヨセフと婚約をしていた。ところが、結婚する前にマリヤは妊娠した。そのため、ヨセフは密かに結婚の取り消しを考えていた。(1) (2) すると主の使い(天使)が現れ、ヨセフに対し、マリヤの妊娠が聖霊によるものであること、安心してマリヤを妻として迎えるべきこと、マリヤは男の子を産むこと、名前をイエスと名付けるべきこと、イエスが救い主であることを告げた。(2) (3) なお、「おとめがみごもって男の子を産む」³³こと、「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」ことは預言者により、すでに述べられていた。(3) (4) ヨセフは天使のお告げに従い、マリヤを妻として迎え、マリヤが産んだ子どもにイエスと名付けた。(4)

6.2. 「エジプト訪問」物語

ここでは物語②のあらすじを示す³⁴。

<あらすじ>

(1) イエスがヘロデ王の代のときにベツレヘムで誕生した際、東方の博士たちがエルサレムを訪れ、「ユダヤの王」として誕生した子どもがどこにいるかを尋ねた。(1) (2) これを聞いたヘロデ王やエルサレムの人々は不安に感じた。ヘロデ王は祭司長や律法学者に、キリストがどこに誕生するかを尋問した。彼らは預言を根拠に、それがベツレヘムであることを述べた。(2) (3) ヘロデ王は東方の博士たちを呼び、彼らをベツレヘムに送り、その誕生した子どもについての調査を依頼した。東方の博士たちはベツレヘムを訪れると、マリヤのところにいるイエスに会い、贈り物を捧げた。東方の博士たちはヘロデ王のところに戻るなど、夢で告げられたため、そのまま自分の国に帰った。そののち、ヨセフは夢の中で天使により、ヘロデ王がイエスを殺そうとしているので、家族でエジプトに逃げるべきであることを告げられた。ヨセフ一家は、ヘロデ王が死ぬまでエジプトに留まることとなる。(3) (4) ヘロデ王は東方の博士たちに騙されたことを知り、ベツレヘム周辺の二歳以下の男の子を殺害した。(4) (5) ヘロデ王の死後、ヨセフ一家は夢のお告げに基づき、イスラエルに戻ったものの、ヘロデ王の子どもであるアケラオが代を継ぎ王になっていることを聞き、これを恐れた。(5) (6) ヨセフ一家は、お告げによりガリラヤのナザレに住むこととなる。(6)

6.3. 「ヨハネによる洗礼」物語

以下、物語③のあらすじを述べる。

<あらすじ>

³³この箇所には、当該「おとめ」が聖霊により身ごもるとは書かれていない。

³⁴「エジプト訪問」物語は、他の共観福音書である「マルコによる福音書」および「ルカによる福音書」には記載されていない。

(1) バプテスマのヨハネ³⁵はユダヤの荒野で教えを述べていた。ヨハネは人々に改悛を促していた。(1) (2) エルサレムやユダヤ全土、ヨルダン付近一帯の人々は、ヨハネを訪れ、罪の告白を行い、ヨルダン川で洗礼を受けていた。(2) (3) ヨハネは洗礼を受けにきたパリサイ人やサドカイ人に対し、改悛すべきこと、そうでなければ審判されることを勧告した。(3) (4) また、ヨハネは、自分のあとからくる人はヨハネよりも大きな権威があり、その前ではヨハネはその人のために靴をぬがせてあげる値打ちもないこと、その人は水ではなく、聖霊と火による洗礼を行うこと、彼により審判が行われることを述べた。(4) (5) イエスはヨルダン川にいるヨハネのところに現れ、ヨハネから洗礼を受けようとした。ところが、ヨハネは、イエスの申し出を断り、むしろ、自分がイエスから洗礼を受けるべき立場であることを述べた。だが、イエスは、今は洗礼を受けさせてもらいたいとヨハネに告げ、ヨハネはイエスに洗礼を行った。(5) (6) 受洗後、イエスが水から上がると、神の霊がイエスに降り、天から、イエスが神の心に適う者であるとの声が聞こえてきた。(6)

6.4. 「イエスが受けた試練」物語

本節では物語④のあらすじを述べる。

<あらすじ>

(1) イエスは御霊により導かれ、荒野で悪魔の試練を受けた。(1) (2) 40日の断食をイエスが終えた後、イエスのもとに悪魔が訪れた。(2) (3) 悪魔はイエスに、石をパンに変えるように言うと、それに対し、イエスは、人はパンのみで生きるのではなく神の口から出る言葉で生きると対抗した。(3) (4) すると、悪魔はイエスを聖なる都の宮の頂上に立たせ、そこから飛び降りることを要請する。それに対し、イエスは、神を試みてはならないと対抗した。(4) (5) さらに、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、もし私を拝むならば、眼下の国々の栄華を与えろと言った。それに対し、イエスは、悪魔に、退くべきであることを告げた。(5) (6) そこで、悪魔はイエスから離れ去り、(6) (7) 代わりに、天使たちがイエスに仕えた。(7)

6.5. 「イエスのガリラヤ宣教」物語

本節では、物語⑤に関するあらすじを述べる。

<あらすじ>

(1) イエスは、ヨハネが捕らえられたことをきっかけにガリラヤに行き、カペナウムに住んだ。(1) (2) この時からイエスの宣教が始まった。(2) (3) イエスは、ガリラヤの湖畔で網を打っている兄弟（ペテロとアンデレ）に会った。イエスはペテロとアンデレ

³⁵後述の「イエスのガリラヤ宣教」物語には、ここでの「ヨハネ」と同一人物ではない、同名の「ヨハネ」が登場する。便宜上、後述の「ヨハネ」を、本稿では「ヨハネ<使徒>」と呼ぶこととする。

についてくるように言ったところ、彼らはイエスに従った。(13) (41) さらに進むと、イエスは、兄弟(ヤコブとヨハネ<使徒>³⁶)とその父ゼベダイに会った。イエスは彼らについてくるように言ったところ、ヤコブとヨハネ<使徒>はイエスに従った。(14) (51) イエスはガリラヤ全地を巡り歩き宣教した。(15) (61) ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こうから夥しい群衆がイエスのもとを訪れ、彼に従った。(16)

7. 異郷訪問譚の特徴との照合

本節では、物語①から物語⑤に対し、異郷訪問譚の特徴を照合することにより、各物語がはたして異郷訪問譚と言えるか否かに関する判別を行うこととする。

7.1. 「イエス誕生」物語

本節では、物語①に対し、異郷訪問譚の特徴を照合することにより、当該物語が異郷訪問譚と言えるか否かの判別を行うこととする。

- ◆特徴①：物語①では、マリヤが妊娠したことによるヨセフの動揺や、ヨセフの判断がお告げに影響されたことなど、ヨセフの動向を主として描かれている。この点から、当該物語の主人公はヨセフであると言える。かかる前提に基づけば、当該物語の主人公であるヨセフは、物語中で異郷を訪問することはない。したがって、この物語は、訪問者が訪問者にとっての異郷を訪問する形式の物語であるとは言えない³⁷。
- ◆特徴②：この物語の主人公はヨセフであるので、「人間」であると言えるものの、ヨセフは「訪問者」であると言えないため、訪問者が「カミ」か「人間」であるという特徴は、当該物語には当てはまらない。
- ◆特徴③：この物語には「訪問者」が存在しないため、特殊な方法・手段により訪問者が異郷へと訪問する特徴は、当該物語には当てはまらない。
- ◆特徴④：この物語には、異郷へと訪問する場面がないため、当然、選ばれた者しか異郷を訪問できないという特徴は当てはまらない。

以上より、物語①は、異郷訪問譚の特徴①から特徴④のすべてに当てはまらない。したがって、物語①は異郷訪問譚とは言えない。

7.2. 「エジプト訪問」物語

本節では、物語②に対して、異郷訪問譚の特徴①から④を当てはめ、当該物語が異郷訪問

³⁶この「ヨハネ<使徒>」は、「ヨハネによる洗礼」物語の「ヨハネ」とは異なる人物である。

³⁷筆者は、この物語が、主人公であるヨセフと異郷に住む存在とが無関係な物語であるということを述べているのではない。ヨセフは異郷に訪問こそしないが、ヨセフの日常生活に天使が来訪している。つまり、この物語は、主人公の日常に異郷の存在が来訪する形式であると言える。

譚と言えるか否かの判別を行う。

- ◆特徴①：物語②の場合、イエスの誕生を、東方の博士たちや、祭司長らの話により、ヘロデ王が知るところとなり、その結果、イエス殺害をヘロデ王が試みることとなる。それにより、ヨセフ一家はエジプトを訪問する。ここで、当該物語の主人公をヨセフとみなし、エジプトをヨセフにとっての異郷とみなせば、当該物語は、訪問者であるヨセフ（あるいはヨセフ一家）が、訪問者にとっての異郷を訪問する形式の物語であると言える。
- ◆特徴②：訪問者であるヨセフは「人間」であるので、当該物語には、訪問者が「カミ」か「人間」であるという特徴が当てはまる。
- ◆特徴③：訪問者であるヨセフは、彼が夢の中での天使のお告げを受け、それを受容するという、言わば特殊なきっかけにより、訪問を開始するため、訪問のきっかけは「特殊」であると言える。一方、いかなる「方法・手段」により、かかる訪問が行われたかについては、物語中には描かれていない。したがって、当該物語は、訪問者が特殊な方法・手段により異郷へと訪問したとは言えず、特徴③は、当該物語に当てはまるとは言えない。
- ◆特徴④：当該物語における異郷への訪問は、ヨセフが受けた夢の中でのお告げをきっかけとしている。かかるきっかけは、一般的とは言えず、夢の中で何者かにより選ばれたことによるものであると言える。したがって、彼の訪問は、選ばれた者による異郷への訪問であると言えるので、当該物語は特徴④に当てはまる。

以上より、物語②の場合、特徴①、特徴②、特徴④が当てはまるものの、特徴③は当てはまらない。したがって、当該物語は、異郷訪問譚の特徴のすべてを満たす訳ではないため、異郷訪問譚であるとは言えない。ただし、四点の特徴の内の三点が当てはまることから、当該物語は、純然たる³⁸異郷訪問譚とは言えないものの、異郷訪問譚的な性質を備えているとは言える³⁹。

7.3. 「ヨハネによる洗礼」物語

本節では、物語③に対し、異郷訪問譚の特徴①から④を当てはめることにより、当該物語が異郷訪問譚と言えるか否かの判別をする。

- ◆特徴①：物語③には、ヨハネがヨルダン川で洗礼を受ける様子が主に描かれているため、この物語の主人公はヨハネであると言える。物語の冒頭には、ヨハネが荒野で

³⁸異郷訪問譚の特徴すべてに当てはまることを指し、本稿ではこれを「純然たる」ものと呼ぶこととする。

³⁹本稿では、異郷訪問譚の特徴の四点すべては備えていないものの、そのいくつか（一点ないし三点）を備えている場合、純然たる異郷訪問譚ではないものの、異郷訪問譚的な性質があるとみなすこととする。

人々に教えを述べていた場面があるものの、以降、ヨハネは終始、ヨルダン川に
いる。ヨハネの宣教において、荒野ないしヨルダン川は、ヨハネが日常的にいた
場所であると言え、彼にとっての異郷とは言い難い。以上を前提とすれば、この
物語にはヨハネが異郷を訪問する場面はない。したがって、異郷を訪問する形式
の物語ではなく、特徴①には当てはまらない。

- ◆特徴②：主人公であるヨハネは「人間」ではあるが、主人公は訪問者ではないので、当該物語は、訪問者が「カミ」か「人間」であるという特徴は当てはまらない。
- ◆特徴③：ヨハネは、彼にとっての異郷へは訪問せず、ヨハネは訪問者と言えないので、当然、訪問者が特殊な方法・手段により異郷へと訪問するという点（特徴③）は、当該物語には当てはまらない。
- ◆特徴④：当該物語には訪問者がいないため、当然、選ばれた者による異郷への訪問という点（特徴④）は当てはまらない。

以上より、物語③は、異郷訪問譚の特徴①から④のすべてについて当てはまらないため、当該物語は異郷訪問譚とは言えない。

7.4. 「イエスが受けた試練」物語

本節では、物語④について、異郷訪問譚の特徴①から④を照合することにより、当該物語が異郷訪問譚と言えるか否かの判別を行う。

- ◆特徴①：物語④は、イエスが悪魔の試みを受け、それにイエスが対抗し、結果、イエスが悪魔を退かせる物語であると言えるので、この物語の主人公はイエスであると言える。イエスは、物語中、荒野・宮の頂上・高い山を訪問する。これらの場所は、イエスにとっての日常的な場所であるとは言えず、むしろ、御霊や悪魔によって連れていかれた非日常的な場所であると言えるので、イエスにとっての異郷とみなすことができる。したがって、当該物語中でイエスは異郷へと訪問したと言え、かかる点は特徴①に当てはまるものである。
- ◆特徴②：主人公であるイエスは「人間」であり、かつ、訪問者である。よって、当該物語は、訪問者が「カミ」か「人間」であるという点（特徴②）に合致する。
- ◆特徴③：当該物語を読む限り、荒野から宮の頂上、宮の頂上から高い山の場面は急に切り替わっており、訪問者であるイエスは、彼にとっての異郷である宮の頂上や高い山に、瞬間的に移動しているように思われる⁴⁰。以上より、訪問者による訪問は特殊な方法・手段によると言え、特徴③は当該物語には当てはまることとなる。
- ◆特徴④：訪問者であるイエスは、まず、御霊に導かれることにより、異郷と言える荒野を訪問する。また、悪魔に連れられることにより、異郷と言える宮の頂上や高い山

⁴⁰少なくとも、かかる、宮の頂上や高い山への移動は、例えば徒歩などの通常的手段に基づいていたとは考え難い。ただし、イエスによる荒野への訪問は、当該物語の箇所を読む限りにおいては、瞬間的な出来事であると断言することができない。

を訪問する。つまり、かかる訪問は、御霊ないし悪魔に選ばれることにより実行されるので特徴④は当てはまる。

以上より、物語④は、異郷訪問譚の特徴①から④のすべてに合致するので異郷訪問譚である。

7.5. 「イエスのガリラヤ宣教」物語

本節では、物語⑤に対し、異郷訪問譚の特徴①から④を当てはめることにより、異郷訪問譚と言えるか否かの判別を行うこととする。

- ◆特徴①：物語⑤は、ヨハネが捕縛されたことを機に、イエスがガリラヤのカペナウムへと移動し、そこで行われた布教活動の次第が描かれているので、主人公はイエスであると言える。カペナウムは、イエスにとり、彼がそれまで住んでいたエルサレム近郊からみると遠方の地であると言えようが、彼が育ったナザレからは、むしろ近い場所と言える。かかる点からすれば、カペナウムはイエスにとっての異郷とは言い難い。以上の前提に基づけば、主人公であるイエスは異郷を訪問したとは言えず、特徴①には合致しない。
- ◆特徴②：主人公であるイエスは「人間」であるものの、異郷への訪問者ではない。よって、当該物語は、訪問者が「カミ」か「人間」であるという点（特徴②）には合致しない。
- ◆特徴③：当該物語では、イエスは、カペナウムへと移動をするものの、この移動は、上述のように、異郷への訪問には該当しない。つまり、当該物語には訪問者が存在しないので、当然、訪問者による、特殊な方法・手段に基づく異郷への訪問もない。仮に、カペナウムをイエスの異郷とみなしたとしても、イエスが、通常ではない方法・手段により、かかる場所へと移動したとは書かれていない。よって、特徴③は当てはまらない。
- ◆特徴④：上述のように、イエスは、異郷への訪問を行っていないので、当然、何者かに選ばれることによる訪問もない。また、仮に、イエスのカペナウム訪問を異郷への訪問とみなしたとしても、かかる移動が何者かによって選ばれることにより実行されたという記載はない。よって当該物語に特徴④が当てはまることはない。

7.6. 小括

7.1.節ないし7.5.節において、物語①ないし⑤を異郷訪問譚の特徴と照合したところ、以下の知見を得ることができた。

物語	特徴①	特徴②	特徴③	特徴④	異郷訪問譚かの判別
物語①	×	×	×	×	異郷訪問譚とは言えない
物語②	○	○	×	○	異郷訪問譚的性質がある

物語③	×	×	×	×	異郷訪問譚とは言えない
物語④	○	○	○	○	異郷訪問譚である
物語⑤	×	×	×	×	異郷訪問譚とは言えない

つまり、物語①から物語⑤の内、異郷訪問譚と言えないものは物語①、物語③、物語⑤であり、異郷訪問譚であるものは物語④であり、純然たる異郷訪問譚とは言えないが異郷訪問譚的な性質があるものは物語②である。

8. 裏返し構造の特徴との照合

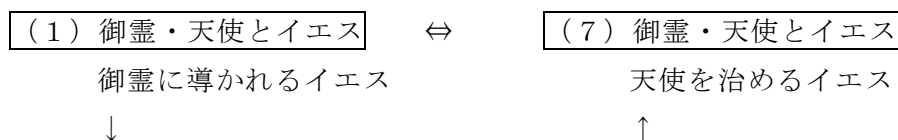
本稿の目的は、新約聖書の範囲において、異郷訪問譚とは言えない形式の物語に裏返し構造が見いだせるかを検証⁴¹するところにある。よって、本稿での検証の対象は、異郷訪問譚と言えない物語形式⁴²である物語①、物語③、物語⑤、および、純然たる異郷訪問譚と言えないものの異郷訪問譚的な性質を持つ物語形式⁴³である物語②である。つまり、物語④は、異郷訪問譚による物語形式⁴⁴であるので、本稿の検証の対象とは言えない。ただし、大林の推認が新約聖書において例外的に当てはまらないという訳ではないことを示すうえでは、かかる物語④に関する検証を行うことは有益であると言える。

そこで、本節では、かかる物語④に関する検証を「予備的検証」と呼ぶこととし、主たる検証を行う前提として、予備的検証を行い、新約聖書においても大林の推認が当てはまることの確認を行うこととする。そのうえで、形式①である物語①、③、⑤、および、形式②である物語②に対し⁴⁵、それぞれ、裏返し構造の特徴の照合を行うことにより、はたして裏返し構造と言えるか否かの判別を行うこととする。なお、本節での裏返し構造の特徴との照合は、6節での各物語のあらすじに付した数字・記号により作成した図式に基づいて行うこととする。

8.1. 予備的検証・物語④

本節では、予備的検証として、形式③に属する物語である物語④について、裏返し構造からなるか否かの確認を、6.4節での物語④のあらすじに付された数字・記号に基づき行うこととする。以下、当該あらすじに付された数字・記号に基づいて作成した図式を提示する。

◆図式（物語④）



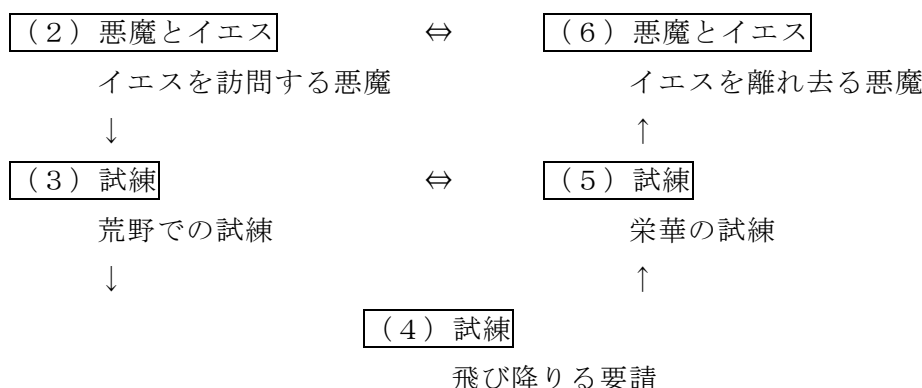
⁴¹本稿ではこれを「主たる検証」と呼ぶこととする。

⁴²本稿ではこれを「形式①」と呼ぶこととする。

⁴³本稿ではこれを「形式②」と呼ぶこととする。

⁴⁴本稿ではこれを「形式③」と呼ぶこととする。

⁴⁵形式①、ないし、形式②に属する物語の検証は、主たる検証に該当する。



上述の図式によれば、(1)と(7)は、御霊あるいは天使とイエスとの関係をテーマに描かれている。(1)の場合、イエスは、御霊により導かれ、荒野へと赴くこととなる。それに対し、(7)の場合、天使がイエスにより治められる立場になる。つまり、(1)と(7)では、御霊と天使という違いがあるものの、御霊あるいは天使は、イエスを従わせる立場から従う立場へと逆転しており、対照的であると言える。

(2)と(6)は、いずれも、悪魔とイエスとの関係をテーマとしている。(1)の場合、イエスに試練を与えるために悪魔が来訪するのであるが、(6)の場合、イエスが試練に屈しないため、イエスから悪魔が離れ去る。ここでの悪魔が来訪することと悪魔が離れ去ることは対照的であると言える。

(3)と(5)は、いずれも、イエスが悪魔から試練を受けることをテーマとしている。(3)では、イエスは、空腹の状況下、荒野において、石をパンに変えるよう試練を受けるのであるが、それに対する(5)では、山上から栄華を極めた国々の姿を見せ、これを受けるか否かの試練をイエスが受ける。ここでの荒野と栄華を極めた国々は対照的であると言える。また、(3)では、悪魔は、イエスが自ら石をパンに変え、それを食べることを要請した⁴⁶のに対し、(5)では、悪魔が、イエスに対し、既に存在する栄華を極めた国々を見せ⁴⁷、それを受け取ることを要請した⁴⁸。ここでの、自分で作ったパンを自分で食べることと、人が作った国を自分が受け取ることは対照的であり、かつ、パンと国々は、その分量において僅かなものと極めて大きなものであり、対照的であると言える。なお、(4)は、対応がない要素であると言える⁴⁹。

以上を、裏返し構造の特徴Aと照合する。物語④の「後半」要素に相当する(7)、(6)、

⁴⁶つまり、自分で作ったものを自分で食べる（現実には存在しないパンを自ら作る）ことの要請であると言える。

⁴⁷栄華を極めた国々は、悪魔が見せた幻影である可能性もあろうが、イエスがこの国々を見たという点で、イエスの主観としては存在するのであり、イエスが自分で作ったものではない。

⁴⁸つまり、人が作ったものを受け取る（既に存在する他人の大きな富を受け取る）ことの要請であると言える。

⁴⁹査読者の一人から、(4)にも対応が設定できるのではないかとのご指摘をいただいた。この点については今後検討するつもりである。

(5)については、それぞれ、「前半」要素に相当する(1)、(2)、(3)に対応し、それぞれが「対照」としての関連性を持っているので、特徴Aと合致すると言える。また、物語④は、(1)と(7)、(2)と(6)、(3)と(5)がそれぞれ対応し、構成されているので、特徴Bと合致すると言える。したがって、物語④は、特徴AおよびB双方の特徴を備えているので裏返し構造である。

以上、本節の予備的検証に基づけば、大林の推認が新約聖書において例外的に当てはまらないという訳ではないと言える。

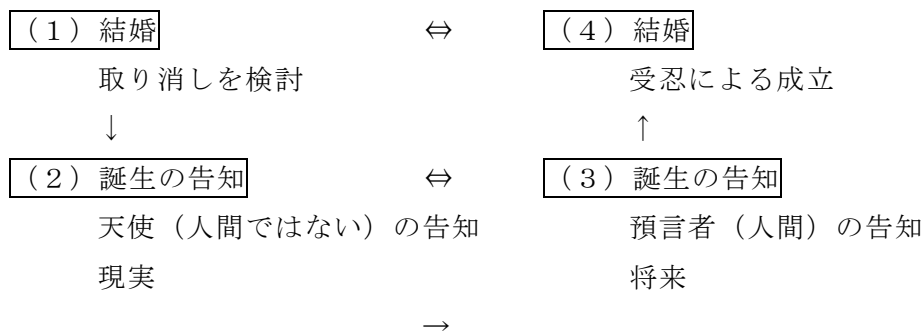
8.2. 形式①に関する検証

本節では、形式①に属する物語である、物語①、物語③、物語⑤について、上述 8.1.節での手法と同様の手法による検証を行うこととする。

8.2.1. 物語①

本節では、物語①が、はたして裏返し構造と言えるか否かの判別を行うこととする。以下は、6.1.節のあらすじに付した数字・記号に基づき作成した図式である。

◆図式(物語①)



(1)および(4)では、ヨセフとマリヤは婚約の状態にあり、実際に結婚に至るかをテーマとしている。(1)の場合、マリヤの妊娠を知ったヨセフが結婚の取り消しを検討している。それに対し、(4)の場合、かかる事情を知りながらも、天使のお告げを受けることにより、これを受忍⁵⁰し、ヨセフはマリヤと実際の結婚にまで至る。ここでの、結婚の取り消しの検討と結婚による受忍とは対照的であると言える。

(2)および(3)には、イエスあるいは「インマヌエルと呼ばれる」人物が誕生することが告知されることをテーマとしている。(2)の場合、天使(人間ではない)がヨセフに対し、直接に誕生の告知をしている。一方、(3)の場合、預言者(人間)が、不特定の人たちを対象に、誕生の告知を予示している。また、(2)では、イエスの命名に言及されて

⁵⁰マリヤの妊娠は、ヨセフとの関係によるものではない。当初、ヨセフは、かかるマリヤの妊娠はユダヤ律法での姦淫罪にあたり、もしそれが公然となった場合には死刑を宣告されるため、ヨセフはこれを避ける配慮により、ヨセフは当初、婚約の解消を検討したとされる。たとえ天使によるお告げがあったとはいえ、ヨセフにとり、マリヤとの結婚の実行は受忍を伴うものであったと言える。

いるが、(3)では、イエスの実名に関する言及がない。さらに、(2)では、マリヤの妊娠の経緯を聖霊によるものとしているが、(3)では、聖霊によるとは書かれていない。なお、イエスないし「インマヌエルと呼ばれる」人物の誕生に関する告知は、(2)では、ヨセフにとっての当時であるのに対し、(3)では、ヨセフ当時のものではなく、ヨセフから見れば過去のものである。以上の点は対照的であると言える。

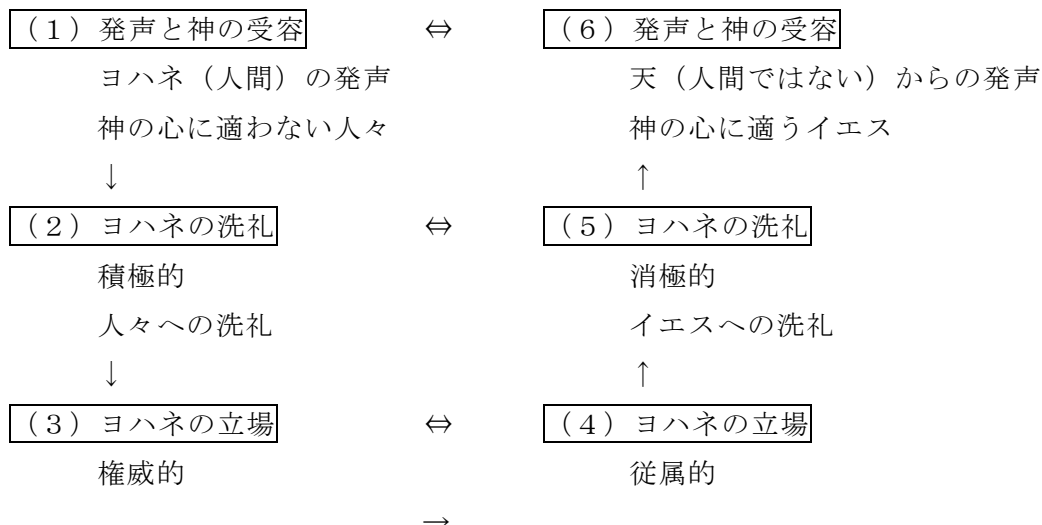
	(2)	(3)
告知対象	ヨセフ	不特定
告知者	天使（人間ではない）	預言者（人間である）
命名	イエス（実名）	インマヌエル（実名ではない）
経緯	聖霊による	聖霊によると書かれていない
告知時	ヨセフ当時	ヨセフにとっての過去

以上について、裏返し構造の特徴 A との照合を行う。物語①の「後半」要素に相当する(4)、(3)は、それぞれ、相応する「前半」要素である(1)、(2)に対応し、かつ、それぞれが「対照」としての関連性を持っている。かかる点は、特徴 A と合致すると言える。また、物語①は、(1)と(4)、(2)と(3)がそれぞれ対応することにより構成されている。かかる点は特徴 B と合致すると言える。よって、物語①は、特徴 A と B の双方の特徴を備えているので裏返し構造である。

8.2.2. 物語③

本節では物語③が裏返し構造か否かの判別を行う。まず、6.3.節のあらすじに付した数字・記号に基づき作成した図式を示す。

◆図式（物語③）



(1) と (6) には、何者かによる発声と神の受容の如何をテーマに書かれている。(1) では、ヨハネがユダヤの荒野で教えを述べ、人々に改悛を促していた。つまり、発声を行っているのはヨハネ(人間)である。また、人々は改悛を促されており、換言すれば、人々は「神の心に適わない」姿であることを意味する。それに対し、(6) では、イエスが「神の心に適う」存在であるとの天による発声(人間ではない)が描かれている。つまり、人間による発声と天による発声、神の心に適わない人々と神の心に適うイエスが対照的に配置されている。

(2) と (5) においては、ヨハネが洗礼を施すことがテーマとなっている。(2) では、ヨハネは、来訪する人々に対し、積極的に洗礼を行っている。一方、(5) では、イエスが来訪し、ヨハネに対し、洗礼を行ってほしいことを述べるのだが、ヨハネは一旦これを拒否する。その後、イエスはさらにヨハネに対し洗礼を願った結果、ヨハネは、イエスに洗礼を行うこととなる。つまりは、ヨハネは、イエスに洗礼を行うことについては消極的であったと言える。それゆえ、ヨハネが洗礼を施すに当たり、積極的であるか、あるいは、消極的であるか、という点は対照的である。また、洗礼の対象である人々とイエスは、その数量(人数)において対照的である。

(3) と (4) には、共に、ヨハネの立場をテーマに描かれている。(3) では、ヨハネは、パリサイ人やサドカイ人に対し、改悛すべきことや、審判の可能性があることを勧告するなど、終始、権威ある立場として描かれている。一方、(4) では、「自分のあとからくる人」がヨハネよりも大きな権威がある存在であり、その人物の前では、ヨハネは権威がなく、むしろ、靴を脱がせてあげるほどの価値もない従属的な存在であることが描かれている。かかる、大きな権威と値打ちがないこととは対照的である。さらに、「パリサイ人」や「サドカイ人」は、当時、権威があるとされていた人たち(現実の権威者)である⁵¹のに対し、「自分のあとからくる人」は、この時点では、誰のことかがわからない人物(未知の権威者)であると言える。かかる点も対照的である。

以上を踏まえ、裏返し構造の特徴 A との照合を行いたい。物語③の「後半」要素は(6)、(5)、(4)であり、これらは、それぞれ、「前半」要素である(1)、(2)、(3)に対応している。かつ、それぞれが「対照」的な関連である。この点については、特徴 A と合致すると言える。また、物語③は、(1) と (6)、(2) と (5)、(3) と (4) が各々対応している。この点については特徴 B と合致すると言える。したがって、物語③は、特

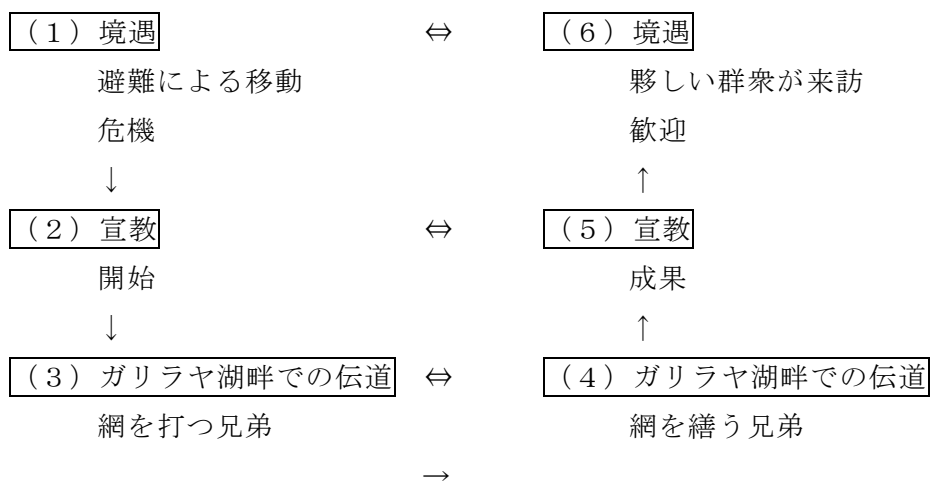
⁵¹大澤(2016:186)は、イエス当時のイスラエルの状況について、「ローマはユダヤ人に大幅な自治を許し、またユダヤ人がその「風習」に従って生きることを認めた。具体的には、軍事権と徴税権、「議会」(サンヘドリン)の召集権と最高裁判権を握っていた」と述べている。ちなみにサンヘドリンは「学者、パリサイ派、祭司、サドカイ派、民の長老たち」(千葉2008:219)合計70人により構成されていた。つまり、「パリサイ人」や「サドカイ人」は宗教的な権威者であったばかりでなく、司法・行政面における権威者であったと言える。なお、「パリサイ人」および「サドカイ人」は、それぞれ「パリサイ派に属する人」および「サドカイ派に属する人」のことを指すのだが、本稿では、日本聖書協会(1989)の表記に従い、「パリサイ人」および「サドカイ人」と記している。

徴 A と B の双方の特徴と合致するので裏返し構造である。

8.2.3. 物語⑤

本節では物語⑤が裏返し構造か否かの判別を行いたい。以下は、6.5.節のあらすじに付した数字・記号に基づいて作成した図式である。

◆図式（物語⑤）



(1) と (6) は、イエスが置かれた境遇がテーマとなっている。(1) では、イエスがガリラヤへと移動するのだが、そのきっかけをヨハネが捕縛されることにおいている。これを素直に読めば、イエスにも捕縛されるなどの危機が迫ったため、エルサレムの遠方であるガリラヤにイエスが避難したと言える⁵²。一方、(6) では、イエスは、夥しい群衆の来訪を受ける立場である。つまりイエスは群衆に歓迎されていると言える。かかる点に基づけば、(1) と (6) は、避難と来訪、危機と歓迎という対照的な関係である。

(2) と (5) については、イエスの宣教⁵³の次第がテーマとなっている。(2) は、宣教がそれまで行われておらず、これからイエスが開始する場面である。それに対し、(5) は、それまで行われてきた宣教が、その時点で、ガリラヤ全地を範囲としていることが述べられている。この点に付き、その後の箇所には、「ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こうから夥しい群衆」が来訪する程度の成果が示されており、イエスがガリラヤ全地を巡回した時点である程度の成果が既にあがっていると推測できる。かかる推測に基づけば、(2) と (5) では、宣教における開始と成果が対照的に示されている

⁵²松田 (2010 : 77) は、ガリラヤへのイエスの移動について、「ヨハネが逮捕されると、再びガリラヤに退いてカファルナウムという町に住んだ。マタイによると、これらの一連の行動はやはり神の計画と意志によるものであった」と記し、かかる移動に対し、マタイは神の計画・意志に基づくものとみなしたことを述べている。ここで、松田 (2010) が言う「カファルナウム」は、本稿におけるところの「カペナウム」のことである。

⁵³本稿では、地域を対象として行う布教行為を「宣教」とし、個人を対象として行う布教行為を「伝道」とした。

と言える。

(3) と (4) については、イエスのガリラヤ湖畔での伝道をテーマとしている。双方とも、イエスが漁師の兄弟を伝道する点においては共通しているものの、兄弟の様子については、(3) の場合、兄弟 (ペテロ、アンデレ) は網を用いて漁をしていたが、(4) の場合、兄弟 (ヤコブ、ヨハネ<使徒>) は網を使用しておらず、これを繕っていた。換言すれば、網は使用できない状態であることになる。つまり、(3) と (4) の場合、網が使用できる状態であることと使用できない状態であることが対照的であると言える⁵⁴。

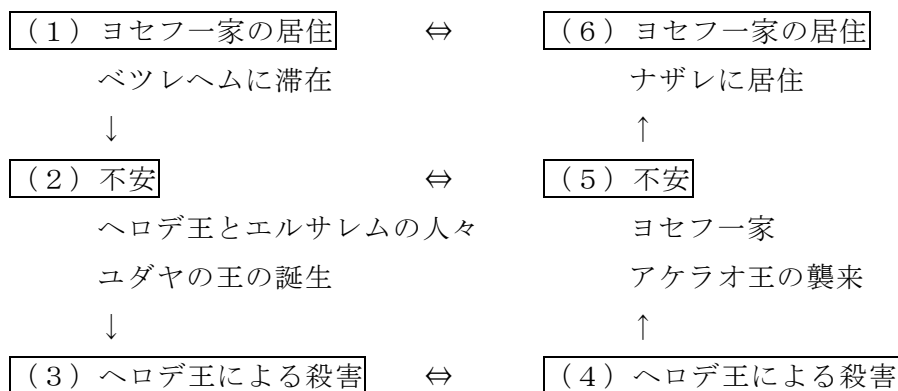
以上を踏まえ、裏返し構造の特徴と照合を行う。特徴 A については、物語⑤の「後半」要素である (6)、(5)、(4) が、それぞれ、「前半」要素である (1)、(2)、(3) に対応している。かつ、それぞれは「対照」的な関連である。したがって、この点に関しては、特徴 A に当てはまると言える。また、物語⑤では、(1) と (6)、(2) と (5)、(3) と (4) が、それぞれ対応している。したがって、この点に関しては特徴 B に当てはまると言える。以上より、物語③は、特徴 A と B の双方の特徴に当てはまると言えるので裏返し構造である。

8.3. 形式②に関する検証

本節では、形式②に属する物語である物語②に関し、上述 8.1.節および 8.2 節における手法と同様の手法による検証を行いたい。

以下は、6.2.節のあらすじに付された数字・記号に基づいて作成した図式である。

◆図式 (物語②)



⁵⁴ペテロが漁師である必要性を、イエスが「人間をとる漁師」と呼ばれた点から、前川 (2017 : 51) は「人間をとる漁師」という言葉はイエスの特徴的な言葉のひとつとされる。この言葉には「漁師」が含まれるため、この言葉をかけられる対象 (招かれる者) は漁師でなければならない。かつ、「わたしに従いなさい」という招きの言葉と共に伝えられていたとすれば、それは召命の場面となる。これがペトロの召命場面にあてはめられたとき、ペトロの職業は「漁師」でなければならないことになる」と述べている。漁師にとり、網は、魚をとるために必要なものである。したがって、ペテロらおよびヤコブらにとっても、網は職業柄必要なものである。そればかりでなく、かかる網には、イエスによる召命にかかわる象徴的な意味が込められていると言える。通常、網の使用の可否に、大きな意味があるとは言いがたいが、以上を踏まえると、兄弟たちの網の使用の可否の様態は、些細なこととはいえない。なお、前川 (2017) の「ペトロ」は「ペテロ」のことである。

イエスを殺害できない

子どもたちが殺害される

→

(1) と (6) は、ヨセフ一家の居住がテーマである。(1) では、ヨセフ一家はベツレヘム⁵⁵に滞在しているのだが、これはイエスを出産するための一時的な寄留である。一方、(6) では、ヨセフ一家が、彼らの元々の居住地であるナザレに戻る事となる。つまり、ベツレヘムは、ヨセフ一家にとっての一時的な滞在地であるのに対し、ナザレは、彼らにとっての居住地であり、かかる点は対照的であると言える。

(2) と (5) は、不安がテーマである。(2) では、「ユダヤの王」⁵⁶ (これはイエスのことを指しており、イエスは「現実の王」ではない⁵⁷) が生まれたという話に対し、「現実の王」であるヘロデ王およびエルサレムの人々が不安を覚える場面が描かれている。一方の、(5) では、ヘロデ王は死んだものの、その子どもであるアケラオが「現実の王」になることにより、ヨセフ一家が不安を覚える場面が描かれている。つまり、(2) では「現実の王」が「メシヤとしての王」に不安を覚え、逆に、(5) では「メシヤとしての王」の家族(ヨセフ一家)が「現実の王」に不安を覚えているので、双方は対照的な関係であると言える。

(3) と (4) は、ヘロデ王による殺害がテーマである。(3) の場合、「ユダヤの王」がベツレヘムに誕生するという知見を受けたヘロデ王は、誕生した「ユダヤの王」(「メシヤとしての王」)を殺害する目的の下、東方の博士たちを偵察に送り出す。ところが、ヨセフがお告げを受けたことにより、一家がエジプトに逃れたため、かかる殺害計画は失敗することとなる。それに対し、(4) の場合、偵察を依頼した東方の博士がヘロデ王のところへ帰って来なかったことにより、ヘロデ王は、ベツレヘム周辺の二歳以下のすべての男の子の殺害を企て、これを成功する。つまり、(3) と (4) では、ヘロデ王による殺害計画の失敗と成功という対照的な出来事が描かれている。

以上を踏まえ、裏返し構造の特徴を当てはめることとする。特徴 A に関しては、物語②の「後半」要素に相当する(6)、(5)、(4)が、それぞれの「前半」要素に相当する(1)、(2)、(3)に対応している。かつ、対応のそれぞれが「対照」的な関係である。よって、この点については、特徴 A に当てはまると言える。また、物語②では、(1) と (6)、(2)

⁵⁵ベツレヘムはエルサレムの近郊にある。「ルカによる福音書」第2章4節には「ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った」と書いてある。つまり、そもそもヨセフ一家はナザレに住んでおり、人口調査のために彼らがベツレヘムに滞在していた期間にイエスは誕生した。

⁵⁶ここでの「ユダヤの王」とは、イスラエル民族が待望していたとされるメシヤを意味する(伊藤 1986 : 67-79)。本稿ではこれを「メシヤとしての王」と呼ぶこととする。

⁵⁷本稿では、イエスが宗教的な意味で「王」なのかという点には触れない。イエスは、実際の国家の王位に就いた訳ではない。なお、本稿では、実際の国家の王位に就いた王のことを「現実の王」と呼ぶこととする。

と(5)、(3)と(4)が、各々対応している。よって、この点については特徴Bに当てはまると言える。以上の点から、物語②は、特徴AとBの双方の特徴に合致するので裏返し構造である。

8.4. 小括

以上、8.1節から8.3節で得られた知見をまとめれば次のようになる。

形式	物語	裏返し構造か否か ⁵⁸
形式①（異郷訪問譚とは言えない）	物語①	○
	物語③	○
	物語⑤	○
形式②（異郷訪問譚的な性質を持つ）	物語②	○
形式③（異郷訪問譚）	物語④	○

つまり、本稿で扱った物語については、形式①から③の如何を問わず、すべてが裏返し構造による構成であることがわかった。

9. 結果および考察

大林の推認によれば、裏返し構造は、異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」であるものの、かかる構造が、はたして、異郷訪問譚とは言えない形式による物語にもみとめられるか、については検証されていなかった。このことを受け、大喜多（2016）では、アイヌ民族による口承文芸をテキストに対して裏返し構造を当てはめてみたところ、「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおぼけ」・「氷の上で」については、異郷訪問譚とは言えない形式であるにもかかわらず、裏返し構造により構成されていることがわかった。かかる事例がアイヌ口承文芸に見いだされた理由について、大喜多（2016）は、アイヌ民族における、対句や交差対句を好む心性に基づいているとの仮説（対称性仮説）を提示した。

当該仮説を検証する目的で、大喜多（2017）は、アイヌ口承文芸と同様に、しばしば対句や交差対句が見いだされることが知られている聖書を題材に、大喜多（2016）と同様の検証を行った。なお、大喜多（2017）では、聖書のなかでも旧約聖書に注目し、その冒頭の巻である「創世記」の巻頭に配置された5篇の物語をテキストとしての検証を行った。それによれば、当該5篇の物語の内、異郷訪問譚とは言えない4篇のなかの3篇（「失樂園」物語、「カインによるアベル殺害」物語、「バベルの塔」物語）が裏返し構造であるという知見を得た。かかる知見は、当該対称性仮説を裏付けるものであると言える。一方、大喜多（2017）では、新約聖書については言及していない。

以上を踏まえ、本稿では、新約聖書に注目し、とりわけ、新約聖書の冒頭の巻である「マタイによる福音書」の巻頭の5篇の物語をテキストとして、大喜多（2017）と同様の手法に

⁵⁸当該物語が裏返し構造である場合「○」、裏返し構造とは言えない場合「×」の記号を付けることとする。

よる分析を行った。

本稿の5節では、本稿でとりあげたテキストの範囲を明らかにし、「マタイによる福音書」巻頭の5篇の物語を、「イエス誕生」物語（物語①）、「エジプト訪問」物語（物語②）、「ヨハネによる洗礼」物語（物語③）、「イエスが受けた試練」物語（物語④）、「イエスのガリラヤ宣教」物語（物語⑤）と定め、各物語のあらすじを6節にて提示した。そのうえで、異郷訪問譚の特徴と照合することにより、かかる物語①から物語⑤が、はたして異郷訪問譚と言えるか否かの判別を行ったところ、物語④は異郷訪問譚による形式（形式③）であり、物語①・物語③・物語⑤は異郷訪問譚とは言えない形式（形式①）であり、物語②は純然たる異郷訪問譚ではないものの、異郷訪問譚的な性質がある形式であることがわかった。以上を踏まえ、まず8.1節では予備的検証として、形式③に属する物語④が裏返し構造であることを、裏返し構造の特徴と照合することにより確認した。そのうえで、形式①に属する物語①・物語③・物語⑤、および、形式②に属する物語②に関し、それぞれ8.2節、および、8.3節において、裏返し構造の特徴を照合することにより、各物語が裏返し構造と言えるか否かの検証を行った。それによれば、8.2節および8.3節で検証したすべての物語が裏返し構造であることがわかった。

本稿で扱ったテキストにおいて、形式①および形式②に属するすべての物語が裏返し構造であることが確認できた。このことは、かかるテキストに対称性仮説が当てはまることを示しており、かかる知見は、対称性仮説の蓋然性が高いとする大喜多（2017）の知見を支持するものである。

なお、大喜多（2017）で扱ったテキストの場合、異郷訪問譚とは言えない物語が、物語Ⅰ・物語Ⅱ・物語Ⅲ・物語Ⅴであり、その内の物語Ⅱ・Ⅲ・Ⅴは裏返し構造であったものの、物語Ⅰについては、裏返し構造とは言えなかった。それに対し、本稿で扱ったテキストの場合、形式①・形式②のすべての物語に裏返し構造が見いだされ、上述の物語Ⅰのような、異郷訪問譚とは言えず、かつ、裏返し構造とは言えない事例を見いだすことはできなかった。はたして、新約聖書において、かかる、異郷訪問譚とは言えず、かつ、裏返し構造とは言えない事例が見いだせるか、については今後検証するつもりである。また、本稿で扱ったテキストは異郷訪問譚と言える物語を含めても、わずか5例に過ぎない⁵⁹。筆者としては、当該対称性仮説が、はたして新約聖書の他の箇所についても当てはまるのか、を検証する必要があると考えている⁶⁰。

10. おわりに

本稿のテキストでは、結果的に、すべてに裏返し構造が見いだされたため、異郷訪問譚的な性質を持つ程度と裏返し構造の発現に関しての検証を行うことができなかった。筆者とし

⁵⁹本稿で検証した、異郷訪問譚と言えない、あるいは、純然たる異郷訪問譚と言えない物語の事例数は、合計4例である。

⁶⁰当該仮説が他のユダヤ文芸でも当てはまるかの検証も、今後行いたいと思っている。

ては、今後、異郷訪問譚としての性質を持つ程度と裏返し構造の発現との関係性についても検討を行いたいと思っている。

謝辞

* 本稿の査読者の一人の方から、本稿の知見と、他の共観福音書における並行物語とを比較することにより、マタイによる福音書の特徴がより明確になるのではないか、などの、今後の研究に関する貴重なアドバイスを賜りました。ここに深く感謝を申し上げます。

引用文献

- 伊藤 明生 (1986) 「共観福音書と「ダビデの子」」『基督神学』3号, 67-79, 東京基督教大学
- 大喜多 紀明 (2012) 「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察—交差対句と心意—」『アジア民族文化研究』11号, 181-213, アジア民族文化学会
- 大喜多 紀明 (2016) 「アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造—異郷訪問譚によらない事例—」『北海道言語文化研究』14号, 45-72, 北海道言語研究会
- 大喜多 紀明 (2017) 「聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造—異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例—」『北海道言語文化研究』15号, 195-216, 北海道言語研究会
- 大澤 史伸 (2016) 「人間イエスの宣教活動に見られる福祉実践 (1) —誕生・洗礼・宣教—」『専修総合科学研究』24巻, 183-195, 専修大学緑鳳学会
- 大林 太良 (1979) 「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』2号, 1-9, 日本口承文芸学会
- 勝俣 隆 (2009) 『異郷訪問譚・来訪譚の研究—上代日本文学編』和泉書院
- 切替 英雄 (2007) 「アイヌの地理的認識と上 (かみ) と下 (しも)」, 津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』14号, 35-56, 北海道大学大学院文学研究科
- 左近 淑 (1971) 『詩篇研究』新教出版社
- 左近 淑 (1992) 「ルツ記の文学構造と主題」『左近 淑 著作集 第1巻』, 303-335, 教文館
- 高原 隆 (1998) 「アイヌ民族の物語り歌による神々との交通について」『文明 21』1号, 27-36, 愛知大学国際コミュニケーション学会
- 千葉 紘 (2008) 「イスラエル・灼熱の旅 リポート—荒野の民から学ぶ—」『学習院高等科紀要』6号, 21-30, 学習院高等科
- 日本聖書協会 (1989) 『聖書』日本聖書協会
- 前川 裕 (2017) 「「漁師」ペトロ—史実か虚構か」『関西学院大学キリスト教と文化研究』18号, 39-53, 関西学院大学キリスト教と文化研究センター
- 松田 央 (2010) 「復活の使信 (その2) —復活のイエスの顕現—」『論集』57巻2号, 69-84, 神戸女学院大学
- 皆川 雅章、鶴丸 俊明、臼杵 勲 (2010) 「民具資料のデジタル・アーカイブ化 第3報—アイヌ文様におけるパターン抽出—」『年会論文集』26号, 146-149, 日本教育情報学会
- 村井 源 (2009) 「マルコ福音書の多層集中構造」『日本カトリック神学会誌』20号, 65-95, 日本カトリック神学会

村井 源 (2010) 「デジタルアーカイブへの intra-textuality の導入に向けて」『じんもんこん 2010 論文集』15号, 131-136, 情報処理学会

森 彬 (2007) 『ルカ福音書の集中構造』キリスト新聞社

山田 耕太 (2014) 「Q 文書の研究史」『敬和学園大学研究紀要』23号, 1-9, 敬和学園大学

依田 千百子 (1982) 「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』5号, 47-57, 日本口承文芸学会

Pop, Mihai(1990). Coordonate structurale ale folclorului literar, in Pop, Mihai & Ruxăndoiu, Pavel (eds.), Folclor literar românesc (pp.77-92).Editura Didactică și Pedagogică.

執筆者紹介

氏名：大喜多 紀明

所属：一般社団法人地域コミュニティ談話会

Email：ohkitan@yahoo.co.jp